

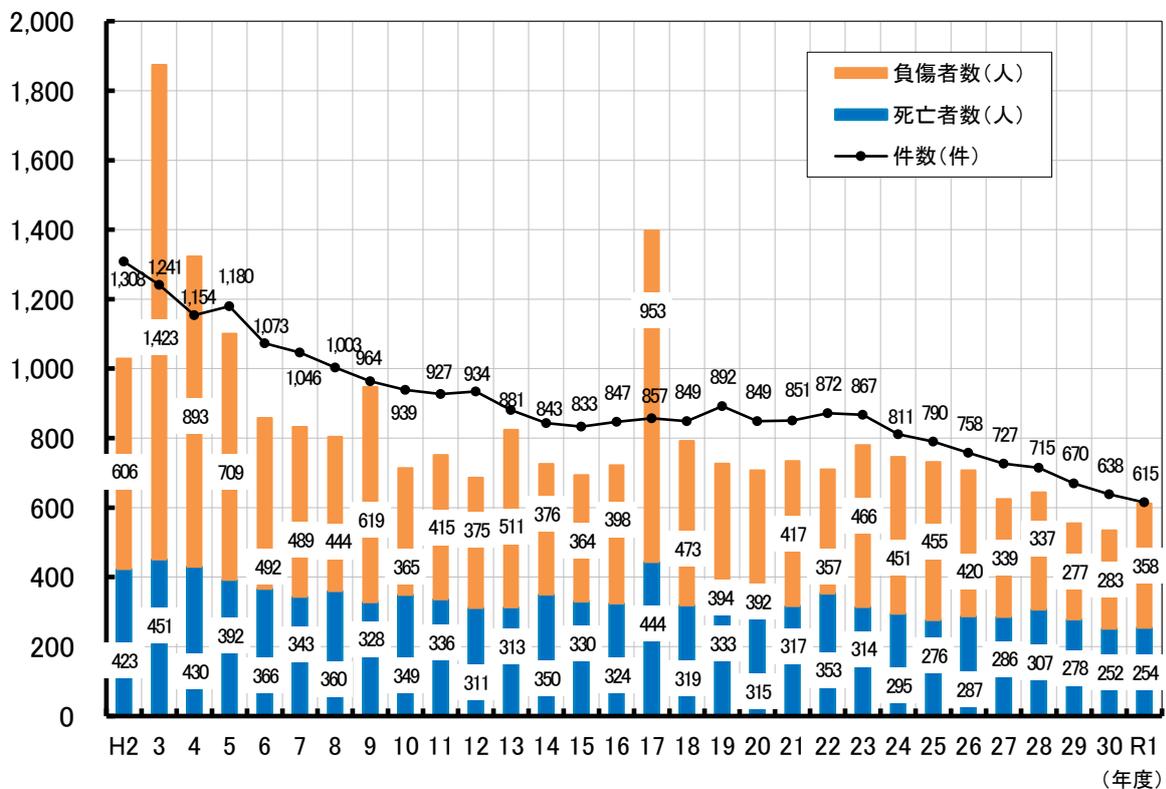
## 2 運転事故に関する事項

### 2.1 鉄軌道における運転事故の発生状況等

#### (1) 運転事故の件数及び死傷者数の推移

- ・運転事故の件数<sup>6</sup> は、長期的には減少傾向にあり、平成29年度から600件台で推移しており、令和元年度は615件(対前年度比23件減)でした。
- ・令和元年度に発生した運転事故による死傷者数<sup>7</sup> は、612人(対前年度比77人増)でした。運転事故による死傷者数は運転事故件数と同様、長期的には減少傾向にありますが、JR西日本福知山線列車脱線事故が発生した平成17年度の死傷者数が1,397人であるなど、甚大な人的被害を生じた運転事故が発生した年度では死傷者数が多くなっています。
- ・なお、令和元年度に発生した運転事故による死亡者数<sup>7</sup> は、254人(対前年度比2人増)でした。

図5： 運転事故の件数及び死傷者数の推移



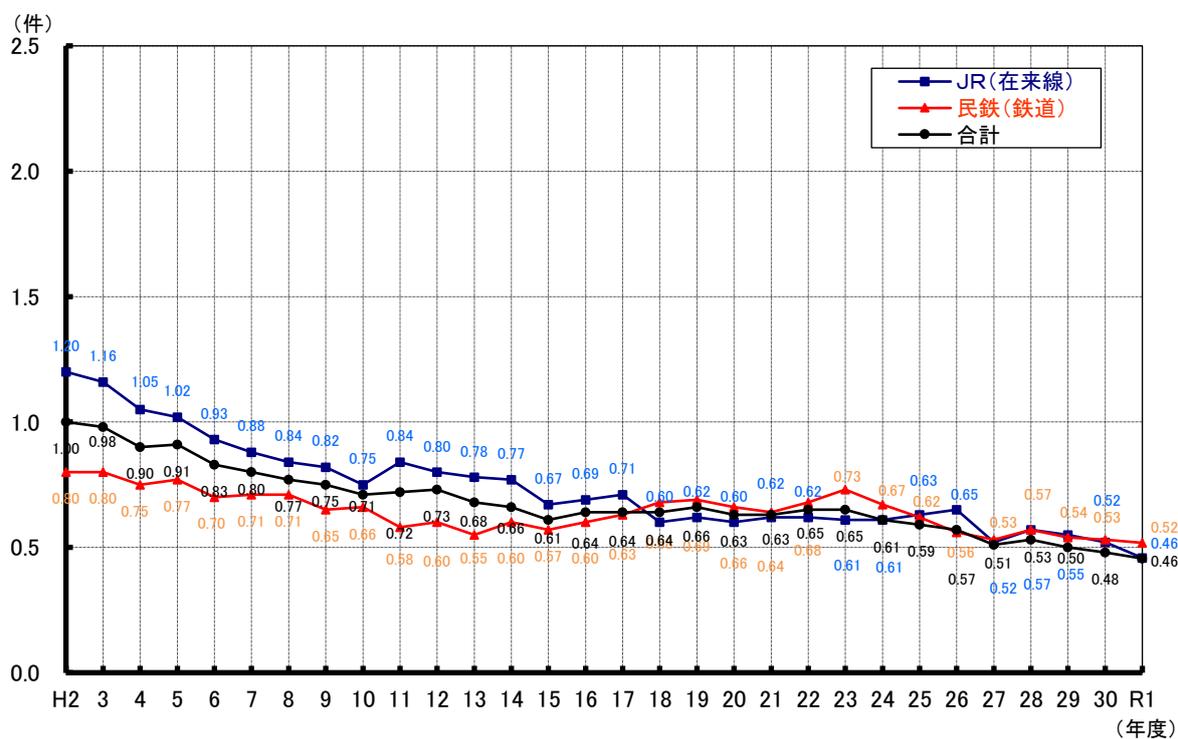
<sup>6</sup> 踏切障害事故、道路障害事故及び人身障害事故にあつては、自殺によるものは、運転事故として扱わないこととしています(自殺と断定できないものについては、運転事故としています)。

<sup>7</sup> 自殺の行為に直接的に巻き込まれたことにより第三者が死傷した場合についても、同様に死傷者数には含めないこととしています。

## (2) 列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数の推移

- ・列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数は、運転事故の件数と同様に長期的には減少傾向にあり、平成25年度から平成29年度までは0.5件台で推移しており、令和元年度は0.46件でした。

図6：列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数の推移



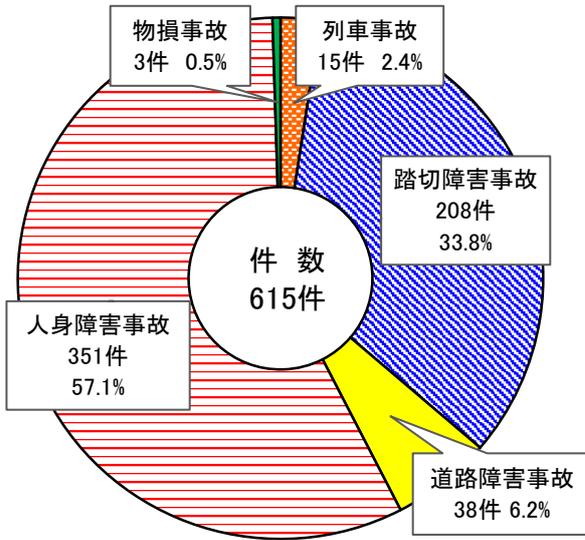
※ グラフ中の「合計」は、JR(在来線+新幹線)と民鉄等(鉄道+軌道)の合計です。

### (3) 運転事故の種類別の件数及び死傷者数

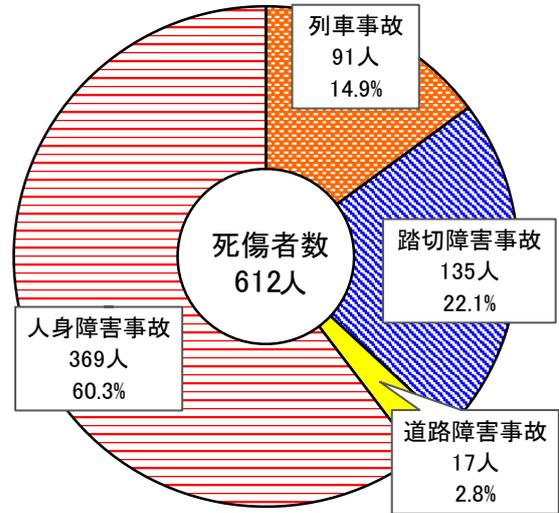
- ・令和元年度に発生した運転事故の件数は、(1)に記述したとおり615件であり、その内訳は、線路内やホーム上での列車との接触などの人身障害事故が351件(運転事故に占める割合57.1%、対前年度比16件減)、踏切道における列車と自動車との衝突などの踏切障害事故が208件(同33.8%、同20件減)、路面電車と自動車等が道路上で接触するなどの道路障害事故が38件(同6.2%、同15件増)、列車事故は15件(同2.4%、同2件増)、物損事故は3件(同0.5%、同4件減)でした。
- ・令和元年度に発生した運転事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は7件(対前年度比3件増)であり、人身障害事故が6件、踏切障害事故が1件(いずれも視覚障害者が関わる事故)でした。
- ・新幹線に関わる運転事故はありませんでした。
- ・令和元年度に発生した運転事故による死傷者数は、(1)に記述したとおり612人であり、その内訳は、人身障害事故によるものが369人(運転事故に占める割合60.3%、対前年度比5人減)、踏切障害事故によるものが135人(同22.1%、同14人減)、道路障害事故によるものが17人(同2.8%、同7人増)、列車事故によるものが91人(同14.9%、同89人増)でした。
- ・なお、令和元年度に発生した運転事故による死亡者数は、(1)に記述したとおり254人であり、その内訳は、人身障害事故によるものが169人(運転事故に占める割合66.5%、対前年度比7人増)、踏切障害事故によるものが82人(同32.3%、同7人減)、道路障害事故によるものが1人(同0.4%、同増減無し)、列車事故によるものが2人(同0.8%、同2人増)でした。

図7： 運転事故の種類別の件数及び死傷者数(令和元年度)

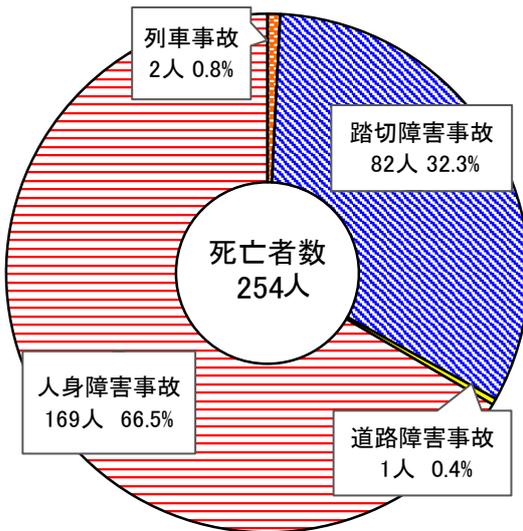
① 件数



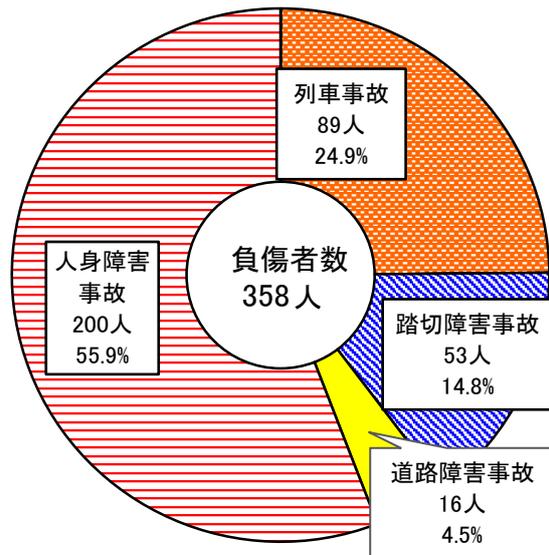
② 死傷者数



③ 死亡者数



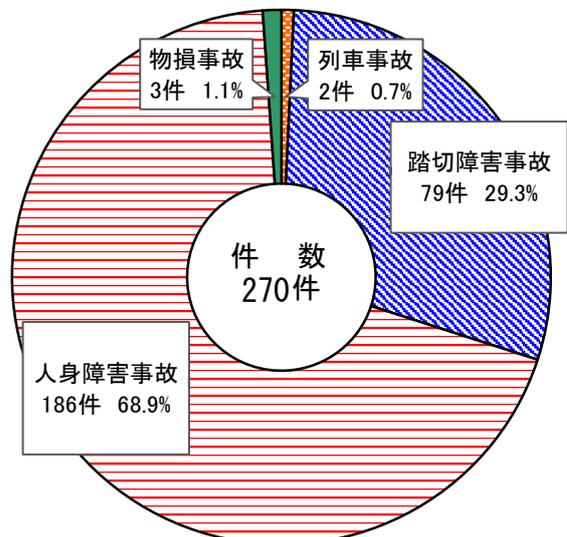
④ 負傷者数



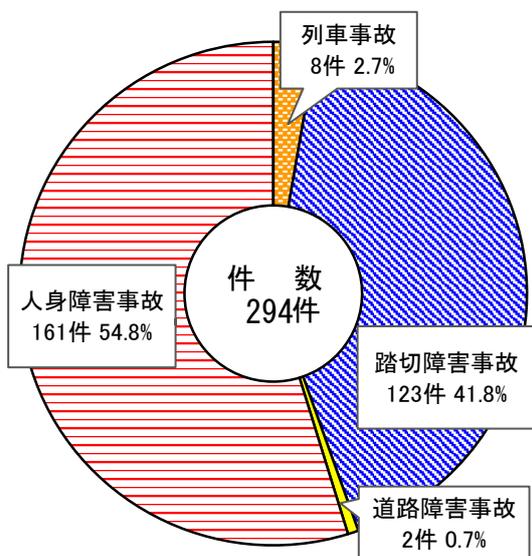
⑤ JR(新幹線)の件数

(※運転事故はありませんでした)

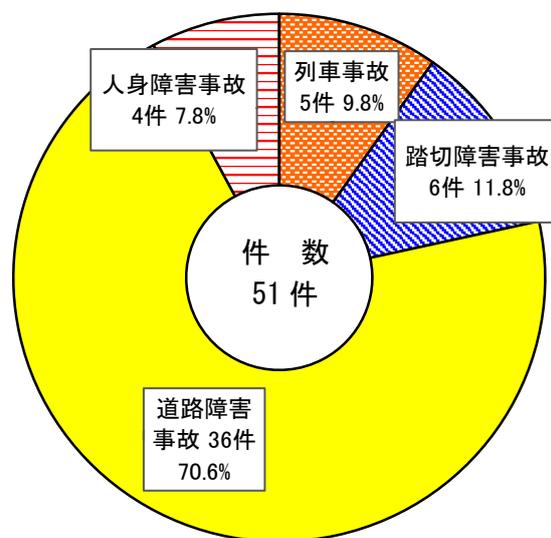
⑥ JR(在来線)の件数



⑦ 民鉄等(軌道以外)の件数



⑧ 民鉄等(軌道)の件数



(4) 令和元年度において5人以上の死傷者又は乗客、乗務員に死亡者が発生した事故

表2: 主な事故の発生状況(令和元年度)

年月日	事業者	場 所	事故種類	死 亡	負 傷	脱線両数	概 要
R1.6.1	横 浜 シー サイド ライ ン	金沢シーサイドライン 新杉田駅構内	人身 障害	0	17	0	始発駅である新杉田駅において、自動運転列車が本来進むべき方向とは逆の方向に走行して、車止めに衝突した。 これにより、列車乗客 17 名が負傷した。
R1.9.5	京 浜 急 行 電 鉄	本線 神奈川新町駅構内	列車 脱線	1	77	3	神奈川新町第一踏切道で、列車がトラックと衝突し、列車が脱線した。 これにより、トラックの運転手 1 名が死亡、列車乗客 75 名、係員 2 名が負傷した。

## 2.2 列車事故の発生状況

- ・令和元年度に発生した列車事故の件数は、運転事故全体の2.4%に当たる15件(対前年度比2件増)であり、その内訳は列車衝突事故が2件(列車事故に占める割合13.3%、対前年度比2件減)、列車脱線事故が13件(同86.7%、同4件増)、列車火災事故が0件(同0%、同増減無し)でした。
- ・令和元年度に発生した列車事故による死傷者数は91人(運転事故に占める割合14.9%、対前年度比89人増)であり、その内訳は列車衝突事故によるものが6人(列車事故に占める割合6.6%、対前年度比4人増)、列車脱線事故によるものが85人(同93.4%、同85人増)、列車火災事故によるものは0人(同0%、同増減無し)でした。
- ・なお、令和元年度に発生した列車事故による死亡者数は2人(運転事故に占める割合0.8%、対前年度比2人増)でした。

図8：列車事故の件数及び死傷者数の推移

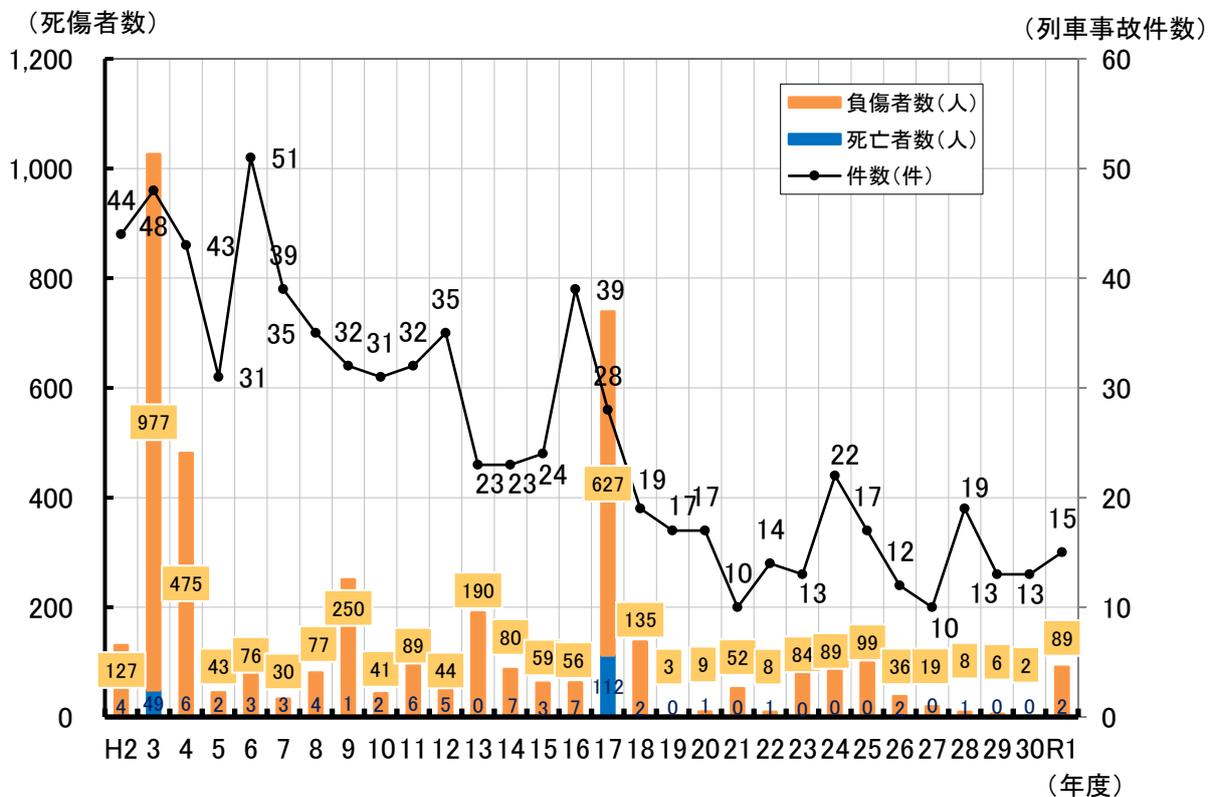
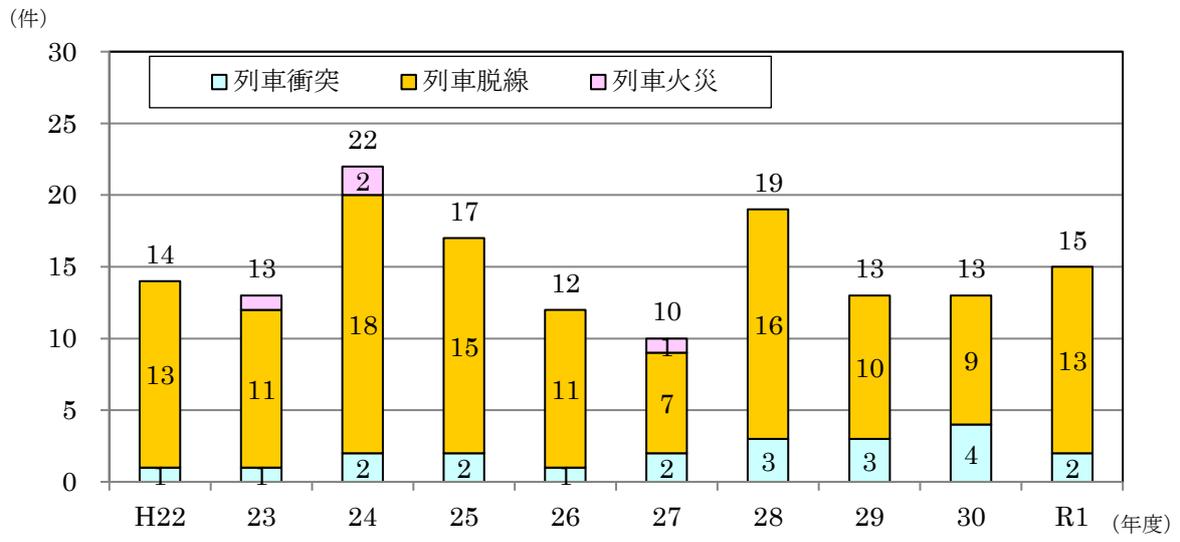


図9：列車事故の件数の内訳(過去10年間)



## 2.3 踏切事故の発生状況

### (1) 踏切事故の件数及び死傷者数の推移等

- ・令和元年度に発生した踏切事故の件数は、運転事故全体の34.3%に当たる211件（対前年度比17件減）でした。
- ・令和元年度に発生した踏切事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は1件（踏切事故に占める割合0.5%、対前年度比増減無し）でした。なお、その1件は、第1種踏切道における視覚障害者が関わる事故でした。
- ・令和元年度に発生した踏切事故による死傷者数は216人（運転事故に占める割合35.3%、対前年度比67人増）であり、うち死者数は84人（同33.1%、同5人減）でした。

図10：踏切事故の件数及び死傷者数の推移

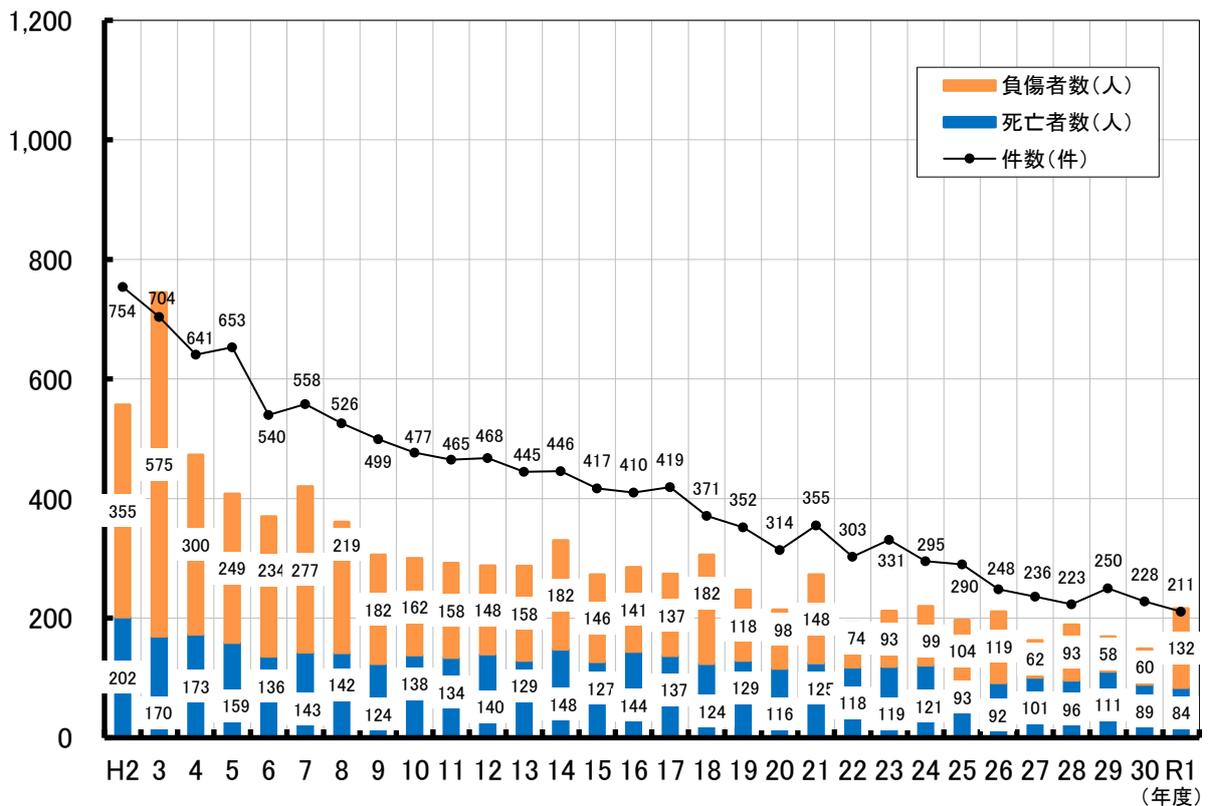
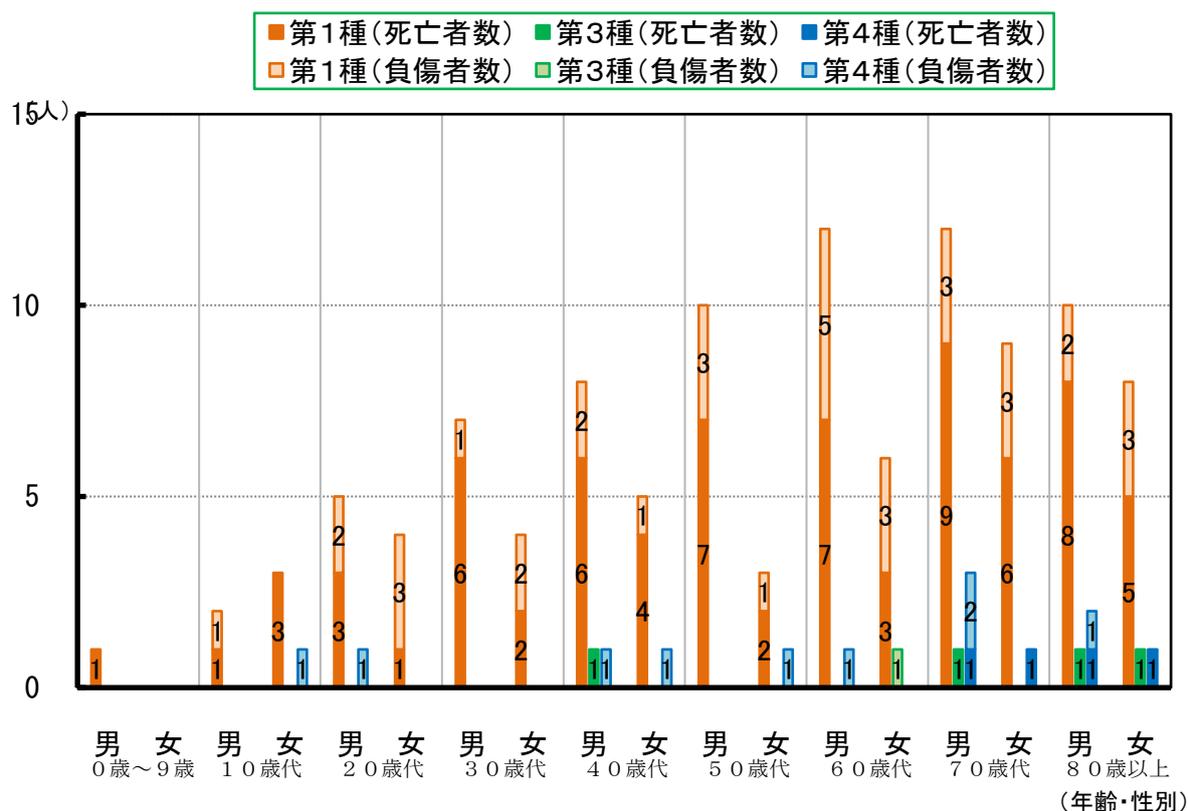


図11:踏切事故による死傷者数の年齢別人数(令和元年度)

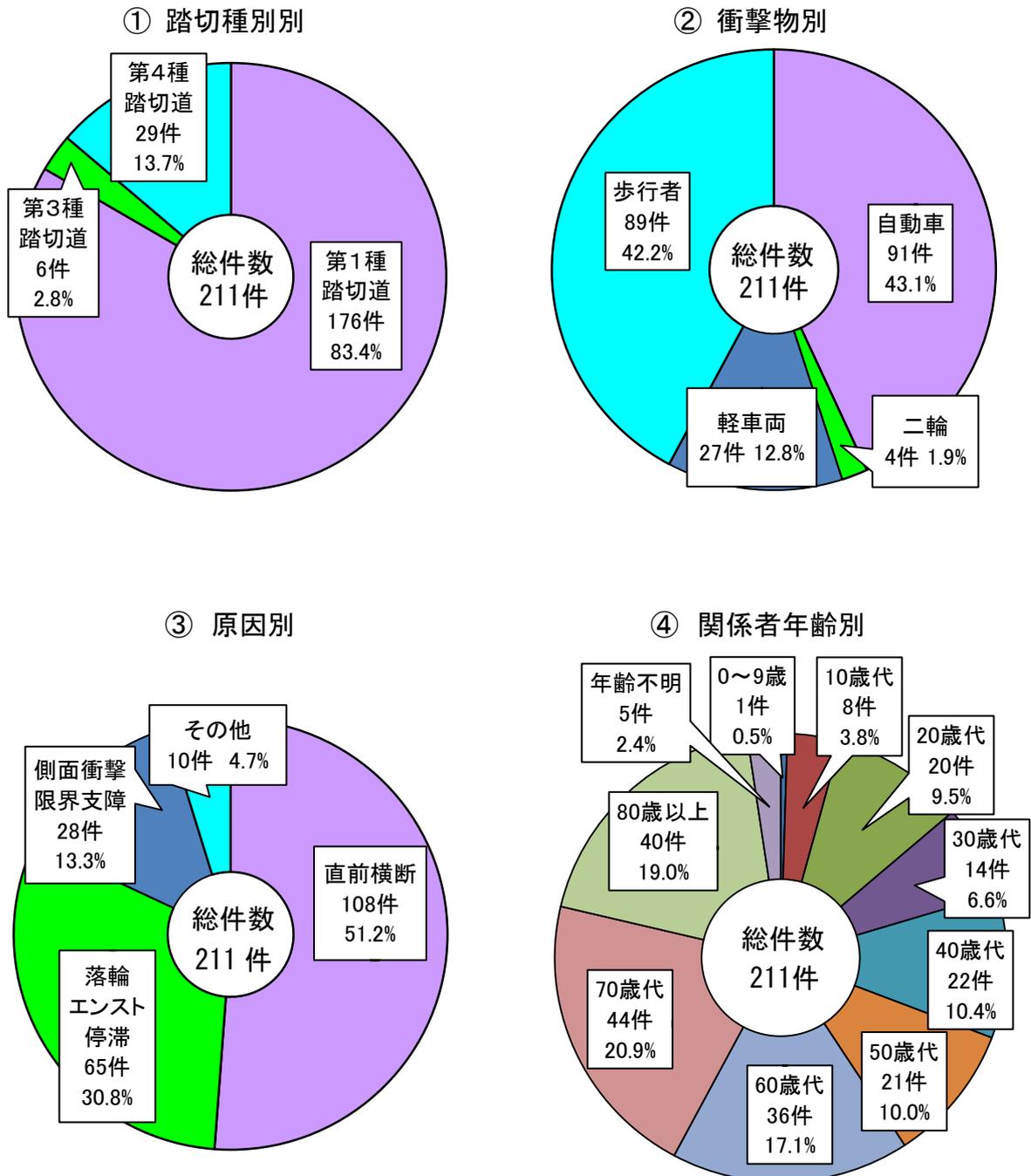


- ※ 自動車等の運転者、歩行者が列車と接触し、死傷した人数を計上しております(列車の乗客等を除く)。
- ※ 高齢者(65歳以上)が関わる踏切事故の内訳は、「第1種踏切道における死傷者数は47人、うち死亡者数は33人」、「第3種踏切道における死傷者数は3人、うち死亡者数は3人」、「第4種踏切道における死傷者数は8人、うち死亡者数は4人」です(年齢の把握ができなかった場合は、除く)。

## (2) 踏切種別別・衝撃物別及び原因別の踏切事故の件数

- ・令和元年度に発生した踏切事故の踏切種別別の内訳は、第1種踏切道176件(踏切事故に占める割合83.4%、対前年度比13件減)、第3種踏切道6件(同2.8%、同1件増)、第4種踏切道29件(同13.7%、同5件減)でした。
- ・衝撃物別の内訳は、自動車91件(踏切事故に占める割合43.1%、対前年度比2件増)、二輪4件(同1.9%、同4件減)、自転車などの軽車両27件(同12.8%、同14件減)、歩行者89件(同42.2%、同1件減)でした。
- ・原因別の内訳は、直前横断108件(踏切事故に占める割合51.2%、同22件減)、落輪・エンスト・停滞65件(同30.8%、同12件増)、側面衝撃・限界支障28件(同13.3%、同1件減)、その他10件(同4.7%、同6件減)でした。

図12：踏切種別別、衝撃物別、原因別及び関係者年齢別の踏切事故の件数(令和元年度)



※高齢者(65歳以上)の件数は、102件

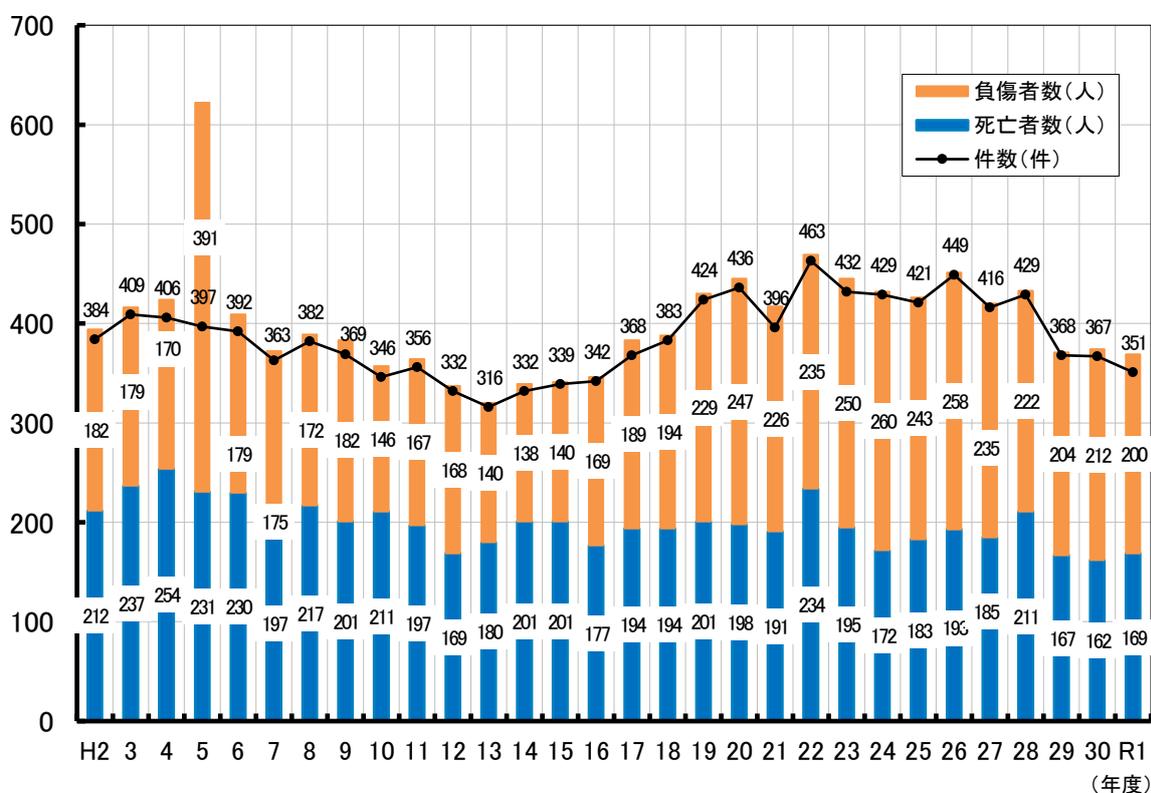
- 直前横断：踏切道において、列車又は車両(以下「列車等」という。)が接近しているにもかかわらず、踏切道を通行しようとする自動車、二輪・原動付自転車又は軽車両等(以下「自動車等」という。)若しくは人が、無理に又は不注意に踏切道内に進入したため列車等と衝突したもの
- 落輪・エンスト・停滞：自動車等が落輪、エンスト、交通渋滞、自動車の運転操作の誤り等により、踏切道から進退が不可能となったため列車等と衝突したもの
- 側面衝撃・限界支障：自動車等が通過中の列車等の側面に接触したものと及び人等が踏切道の手前で停止した位置が不適切であったために列車等と衝突したもの
- 関係者年齢：関係者年齢とは、歩行者等の年齢(自動車等にあつては、運転者の年齢)

## 2.4 人身障害事故の発生状況

### (1) 人身障害事故の件数及び死傷者数の推移等

- ・令和元年度に発生した人身障害事故の件数は、運転事故全体の57.1%に当たる351件(対前年度比16件減)でした。
- ・令和元年度に発生した人身障害事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は6件(人身障害事故に占める割合1.7%、対前年度比3件増)であり、いずれも視覚障害者が関わる事故でした。
- ・新幹線に関わる人身障害事故の件数は0件(人身障害事故に占める割合0%、対前年度比2件減)でした。
- ・なお、令和元年度に発生した人身障害事故による死傷者数は369人(運転事故に占める割合60.3%、対前年度比5人減)、うち死亡者数は169人(同66.5%、同7人増)でした。

図13： 人身障害事故の件数及び死傷者数の推移



## (2) 原因別の人身障害事故の件数等

・原因別の内訳は、次のとおりです。

①「公衆等が無断で線路内に立ち入る等により列車等と接触したもの（線路内立入り等での接触）」が180件（人身障害事故に占める割合51.3%、対前年度比2件増）であり、これによる死傷者数は182人（同49.3%、同2人増）、うち死亡者数は134人（同79.3%、同1人増）でした。

②「旅客がプラットホームから転落したことにより列車等と接触したもの（ホームから転落して接触）」が38件（同10.8%、同13件減）、これによる死傷者数は38人（同10.3%、同15人減）、うち死亡者数は24人（同14.2%、同1人増）でした。

③「プラットホーム上で列車等と接触したもの（ホーム上で接触）」が122件（同34.8%、同5件減）、これによる死傷者数は122人（同33.1%、同5人減）、うち死亡者数は10人（同5.9%、同4人増）でした。

・令和元年度に発生した人身障害事故のうち、身体障害者が関わる事故の原因別の内訳は、「公衆等が無断で線路内に立ち入る等により列車等と接触したもの（線路内立入り等での接触）」が1件、「旅客がプラットホームから転落したことにより列車等と接触したもの（ホームから転落して接触）」が5件であり、これによる死傷者数は6人、うち死亡者数は5人でした。なお、いずれの事故も視覚障害者が関わる事故でした。

・その他、車両の故障、鉄道係員の作業誤り等によるものは11件（人身障害事故に占める割合3.1%、対前年度比増減無し）、これによる死傷者数は27人（同7.3%、同13人増）、うち死亡者数は1人（同0.6%、同1人増）でした。

図14：人身障害事故の原因別の件数及び死傷者数(令和元年度)

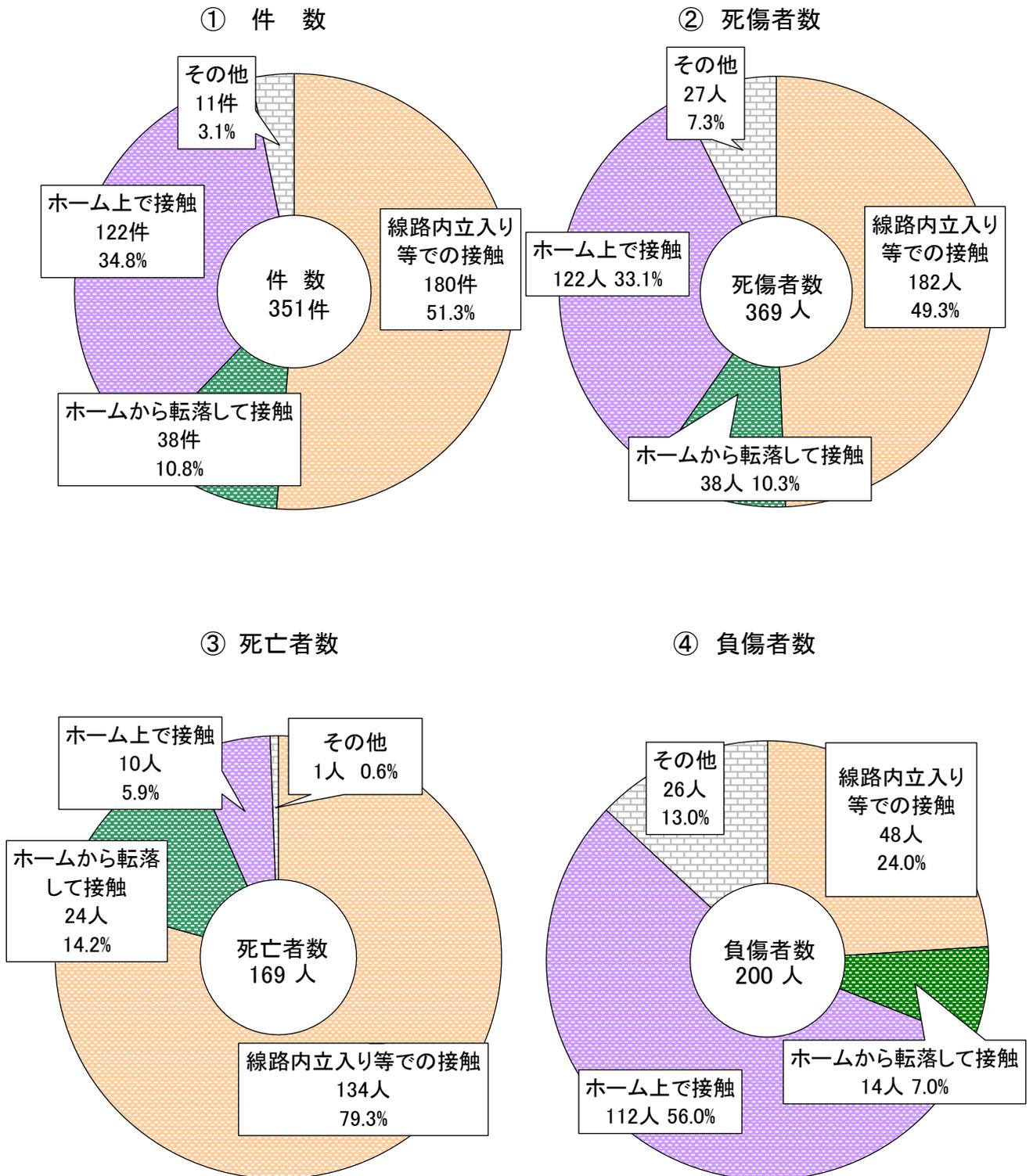


図15: 人身障害事故の原因別件数の推移

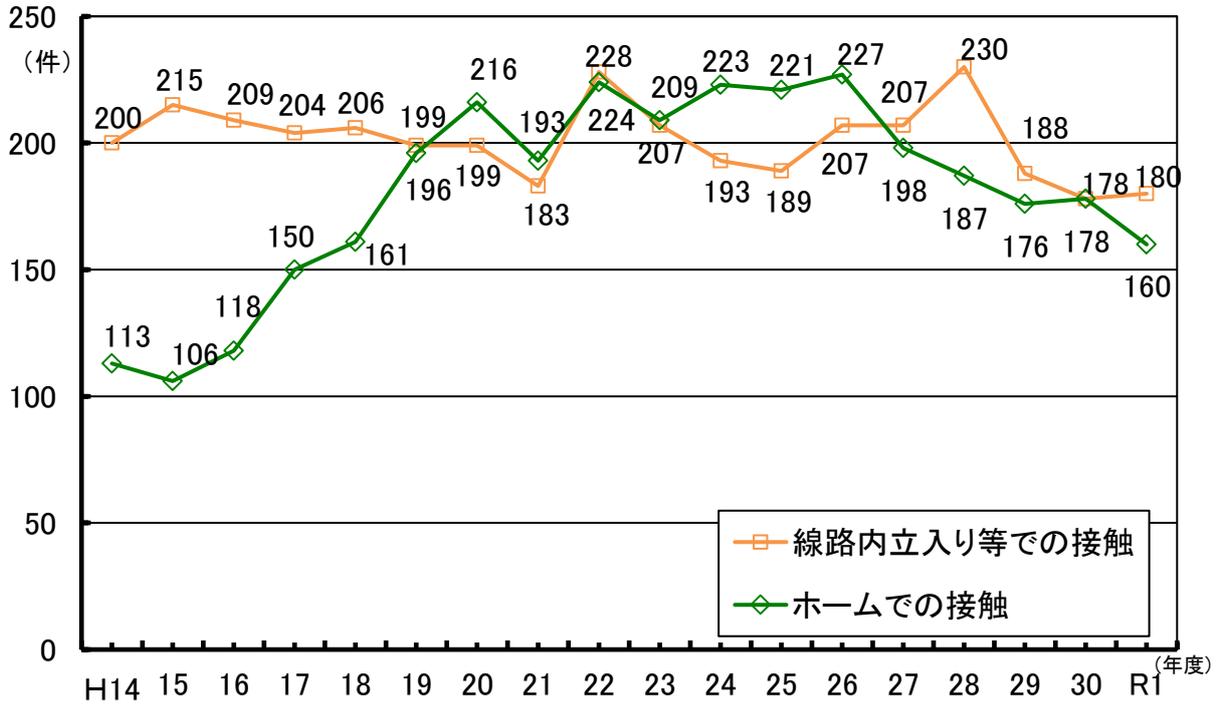
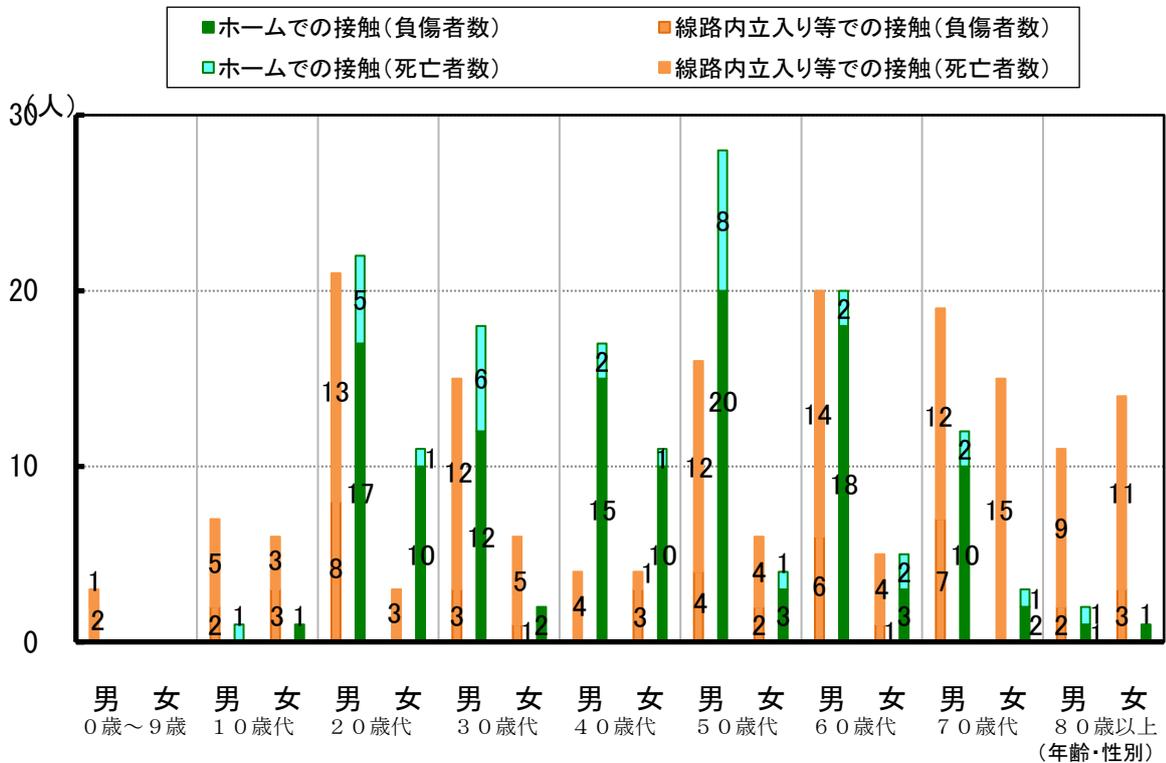


図16: 人身障害事故による死傷者数の年齢別人数(令和元年度)



※ 年齢の把握ができなかった場合は、除いています。

※ 高齢者(65歳以上)については、ホームでの接触による死傷者数は27人、うち死者数は6人、線路内立ち入り等での接触による死傷者数は63人、うち死者数は50人です。

## 2.5 事業者区分別の運転事故件数

・事業者区分別の運転事故の件数は、下表のとおりです。

表3:事業者区分別の運転事故件数(令和元年度)

事業者区分		事故種類							合計
		列車衝突	列車脱線	列車火災	踏切障害	道路障害	人身障害	物損	
JR(在来線)			2		79		186	3	270
JR(新幹線)									0
民鉄等			8		123	2	161		294
大手民鉄			2		70		121		193
公 営			1				5		6
新交通・モノレール							2		2
中小民鉄			5		53	2	33		93
路面電車		2	3		6	36	4		51
合計		2	13	0	208	38	351	3	615
地域鉄道(再掲)		2	7		52	33	17		111
地域鉄道(鉄道)			5		47	2	14		68
地域鉄道(軌道)		2	2		5	31	3		43

※1 路面電車を除く

※2 「公営」は、東京都交通局(上野懸垂線、日暮里・舎人ライナー)を含み、東京都交通局(路面電車)及び札幌市交通局は路面電車を除く

※3 「大手」は、西武鉄道山口線を含む

※4 「中小」は、準大手鉄道事業者(新京成電鉄、北大阪急行電鉄、泉北高速鉄道、山陽電気鉄道)を含み、大阪市高速電気軌道は南港ポートタウン線を含む

※5 「地域鉄道」は、15ページの脚注5をご覧ください。